1部77円(税込み)

対がん協会報

公益財団法人 日本対がん協会 「日本対がん協会」と「対がん協会」は登録商標です

〒104－0045 東京都中央区築地５－３－３ 築地浜離宮ビル７階
☎ 03－3541－4771 FAX 03－3541－4783 https://www.jcancer.jp/

第740号 2024年(令和６年)５月１日(毎月１日発行)

主な内容

３面 2023年度がん検診研究助成18件を採択
４～５面 2023年度版・がん検診年次報告書から
６面 2023年度MOD奨励賞に２人が決定

2020年のがん罹患数は94万5055人 罹患数１位▶男性は前立腺がん 女性は乳がん

『令和２年全国がん登録罹患数・率報告』 厚生労働省が公開

厚生労働省は、「令和２年全国がん登録罹患数･率報告」をホームページで公開した。2020年１～12月に新たにがんと診断された罹患数(上皮内がんを除く)は94万5055人(男性53万4814人、女性41万238人)。部位別の罹患数は大腸が14万7725人(15.6%)で最も多く、次いで肺12万759人(12.8%)、胃10万9679人(11.6%)などとなった。

男女別に罹患数の割合が多い部位(上皮内がんを除く)をみると、男性は前立腺が８万7756人(16.4%)で最も多く、次いで大腸８万2809人(15.5%)▽肺８万1080人(15.2%)▽胃７万5128人(14.0%)▽肝および肝内胆管２万3707人(4.4%)の順になり、2019年と比べると、肺が胃を上回った。

女性は、乳房の９万1531人(22.3%)が最も多く、次いで大腸６万4915人(15.8%)▽肺３万9679人(9.7%)▽胃３万4551人(8.4%)▽子宮２万8492人(6.9%)の順となっている。このうち子宮の内訳は、子宮頸部１万353人▽子宮体部１万7779人だが、前がん病変である上皮内がんを含めると、子宮頸部は３万2734人になる。

上位５部位が全部位に占める割合は男性65.5%、女性63.2%となっている。

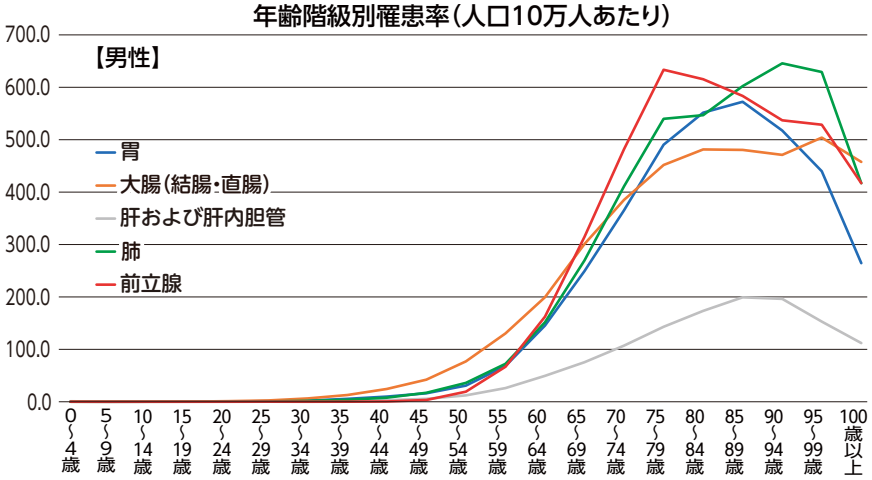
人口10万人あたりの罹患率(上皮内がんを除く)は、粗罹患率が749.9、年齢調整罹患率が362.4だった。部位別の年齢調整罹患率では、男性は大腸68.2▽前立腺62.1▽肺58.9▽胃54.9▽肝および肝内胆管17.5の順で高く、女性は乳房95.0▽大腸42.1▽子宮33.3▽肺24.0▽胃19.9の順で高かった。

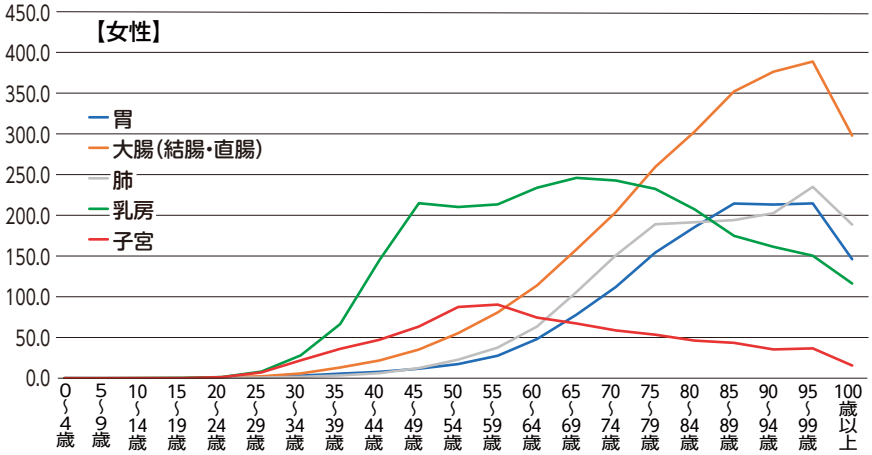
罹患者のうち15歳未満の小児がんは2080人だった。また、年代別の割合は、45歳未満4.2%▽45～64歳20.0%▽65～74歳29.7%▽75歳以上46.1%となった。

全部位の人口10万人あたりの年齢階級別罹患率をみると、男性は40歳未満で100未満と低く、60歳以上で1000を超えた。上位５部位の傾向は、大腸が比較的早く50代前半から増加傾向となり、70代後半でその傾向が鈍った。前立腺、肺、胃は50代後半から増加し、65～99歳は前立腺、70～99歳は肺、75～94歳は胃がそれぞれ罹患率で上回った。肝および肝内胆管85～89歳でピークとなり、その後減少していた。

女性は30歳未満で100未満、70歳以上で1000を超えた。上位５部位の傾向は、乳房が30代前半から急増し、45～49歳と65～69歳の２回ピークがあった。大腸は男性と同じように比較的早く50代前半から増加していた。胃、肺は50代後半から増え始め、胃は85～89歳、肺は95～99歳まで増加傾向が見られた。子宮は20代後半から緩やかに増加し、55～59歳がピークになっていた。

年齢階級別罹患率(人口10万人あたり)





※厚生労働省『令和2年全国がん登録罹患数･率報告』より作成

主な部位の発見経緯については、がん検診・健診・人間ドックで発見された症例の割合が多い部位は、前立腺（24.1%）▽乳房（女性のみ、23.1%）▽胃（17.0%）▽甲状腺（16.7%）▽大腸（16.6%）など。対策型検診の対象である肺も比較的高い割合だった。また、上皮内がんを含めると、子宮頸部（32.5%）の割合が最も高くなった。

初回診断時の状態では、皮膚、喉頭、膀胱、脳・中枢神経系、肝および肝内胆管などは、がんが原発臓器にとどまっている傾向が見られた。乳房、前立腺も比較的早期に診断されていた。一方、悪性リンパ腫、すい臓、肺、胆のう・胆管は初回診断時、すでに遠隔転移している症例が多いことがわかった。

初回の治療は、膀胱、皮膚、卵巣、大腸、乳房では外科・体腔鏡・内視鏡的治療が行われていた。喉頭、脳・中枢神経系、口腔・咽頭、乳房、食道では放射線治療も多く行われていたが、部位は限定的だった。また、化学・内分泌療法は、乳房（女性）、白血病、多発性骨髄腫、悪性リンパ腫、前立腺など大半の部位で適用され、外科手術の補助療法として適用されているようにみられた。

「令和２年全国がん登録罹患数・率報告」は厚生労働省のホームページ「がん登録」から閲覧できる。

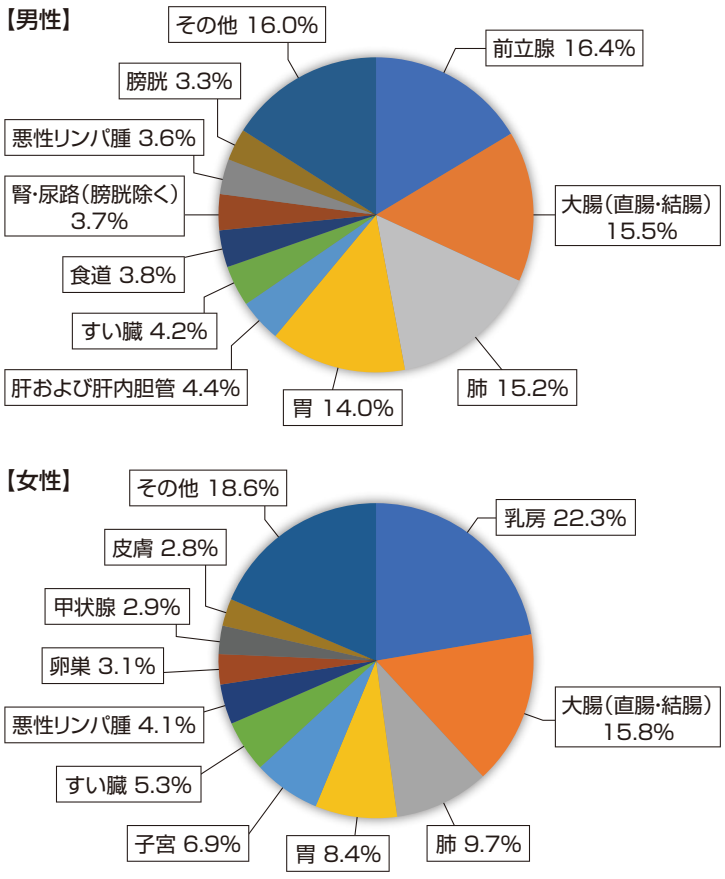
URL:https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kenkou_iryou/kenkou/gan/gan_toroku.html

2020年のがん罹患数

	男性（上皮内がんを除く）	女性（上皮内がんを除く）	総数（上皮内がんを除く）	男性（上皮内がんを含む）	女性（上皮内がんを含む）	総数（上皮内がんを含む）
全部位	**534,814**	**410,238**	**945,055**	**586,105**	**469,620**	**1,055,728**
口腔・咽頭	15,490	6,562	22,052			
食道	20,128	4,430	24,558	22,116	4,955	27,071
胃	75,128	34,551	109,679			
大腸（結腸・直腸）	82,809	64,915	147,725	107,638	78,659	186,298
結腸	51,733	46,507	98,240	69,599	56,603	126,202
直腸	31,076	18,408	49,485	38,039	22,056	60,096
肝および肝内胆管	23,707	11,037	34,744			
胆のう・胆管	11,705	9,687	21,392			
膵臓	22,557	21,891	44,448			
喉頭	4,205	408	4,613			
肺	81,080	39,679	120,759	82,121	41,297	123,418
皮膚	12,418	11,427	23,846	15,081	14,728	29,810
乳房	622	91,531	92,153	687	103,057	103,744
子宮	―	28,492	28,492	―	50,873	50,873
子宮頸部	―	10,353	10,353	―	32,734	32,734
子宮体部	―	17,779	17,779			
卵巣	―	12,738	12,738			
前立腺	87,756	―	87,756			
膀胱	17,424	5,761	23,185	33,795	9,475	43,270
腎・尿路（膀胱除く）	19,660	9,481	29,141			
脳・中枢神経系	3,077	2,636	5,714			
甲状腺	4,509	11,918	16,427			
悪性リンパ腫	19,246	16,751	35,997			
多発性骨髄腫	3,920	3,349	7,269			
白血病	8,384	5,888	14,272			

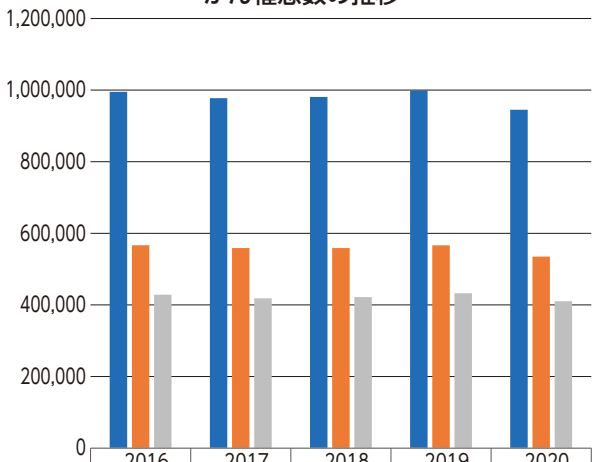
※厚生労働省『令和２年全国がん登録罹患数・率報告』より作成
※「総数」は男女および性別不詳の合計
※上皮内がんを含む「大腸（結腸・直腸）」は粘膜がんを含む

主な部位別の罹患割合



※厚生労働省『令和2年全国がん登録罹患数・率報告』より作成

がん罹患数の推移



	2016	2017	2018	2019	2020
総数	995,131	977,393	980,856	999,075	945,055
男性	566,574	558,869	558,874	566,460	534,814
女性	428,499	418,510	421,964	432,607	410,238

※厚生労働省「全国がん登録罹患数・率報告」より作成（上皮内がんを除く）

2023年度がん検診研究助成事業　日本対がん協会

がん早期発見へ　基礎研究、臨床研究、がん検診の受診率向上などで18件を採択

日本対がん協会は2023年度のがん検診研究助成事業について、18件の研究を採択し、発表した。この事業は、がん対策の原点でもあるがんの早期発見に向けた「がん検診」の向上につながる研究を支援する目的で2023年度にスタートした。

対象となる研究分野は、がん検診技術の新たな開発を目標にした基礎的な取り組みから、がん検診の精度や精度管理の問題の検証、さらにがん検診受診の阻害になっている社会的な要因の分析まで幅広い。１件あたり100万円を上限として総額1000万円を助成する。研究が複数年にわたる場合、最長３年まで助成する。

2023年度は、国内の大学や研究機関、医療機関、日本対がん協会のグループ支部に所属する研究者や医療従事者（いずれも日本国籍を有する者。ただし、過去３年以内に喫煙に関係する団体から助成を受けた者は除く）を対象に2023年７～９月に公募。応募のあった研究テーマについて、有識者で構成する審査委員会が幅広い視点で厳正な審査を行い、「基礎研究」「臨床研究」「がん検診の受診率や質の向上、普及啓発に向けた手法の開発、社会調査等」の３分野で計18件を採択した。

2023年度に採択された研究テーマと研究者は次の通り。（敬称略、順不同）

【分野Ⅰ：基礎研究】

テーマ	氏　名	所　属
卵巣がんエクソソームを利用した新しい早期診断プラットフォーム開発	横井　暁	名古屋大学医学部付属病院 産科婦人科 講師
血中DNA Palindrome配列発現解析による乳癌早期発見法の開発	猪狩　史江	順天堂大学医学部附属浦安病院 乳腺・内分泌外科 准教授
膵のう胞性疾患の病態進展における血中タンパク質動態の解明と膵癌高リスク者診断への応用	田口　歩	愛知県がんセンター 分子診断トランスレーショナルリサーチ分野 分野長
口腔扁平上皮腫瘍性病変の表層分化機序の解明と検出キットの開発	野田　百合	関西医科大学 病理学講座 診療講師

【分野Ⅱ：臨床研究】

テーマ	氏　名	所　属
AIがマンモグラフィ検診にもたらす影響　受診者の視点からの分析	藤岡　友之	東京医科歯科大学 先端人工知能医用画像診断学講座 准教授
医療過疎地における大腸カプセル内視鏡を用いた大腸がん二次検診の可能性	大西　祥代	岐阜大学医学部付属病院 地域医療医学センター 特任助教
妊娠中のHPV検診の適切なプロトコル作成	水島　大一	横浜市立大学 医学部産婦人科 講師
磁気誘導全消化管カプセル内視鏡の多施設共同前向き研究	大宮　直木	学校法人藤田学園 藤田医科大学医学部先端光学診療学 主任教授
内視鏡検診の偽陰性癌に関する多施設後ろ向き研究	古川　和宏	名古屋大学医学部付属病院 消化器内科 病院講師
胃がん内視鏡検診でのAI併用はダブルチェックの代替えになるかの検証	加藤　元嗣	北海道対がん協会 会長
単検診施設におけるCOVID－19流行に伴う乳がん検診への影響の検討	佐伯　澄人	がん研有明病院健診センター(検診部門)･がん研究所がんエピゲノムプロジェクト 医員(乳がん検診読影及び精度管理担当)･研究所内研究生

【分野Ⅲ：がん検診の受診率向上、普及啓発に向けた手法開発、社会調査等】

テーマ	氏　名	所　属
知的障害者の低いがん検診受診率をモニタリングする方法の検討	藤原　雅樹	岡山大学病院 精神科神経科 助教
リスク層別化検診の導入を目指した乳がん発症リスクモデルの開発	髙田　正泰	京都大学大学院 医学研究科外科学講座乳腺外科学 准教授
長野県における低線量肺癌CT検診の肺癌早期発見および死亡率に与える影響－がん登録情報からの分析－	小泉　知展	信州大学医学部付属病院 信州がんセンター 特任教授・長野県がん登録室長
胃内視鏡搭載循環バスを用いた胃がん検診の受診率向上および普及啓発に関する研究	足立　政治	岐阜西濃医療センター西濃厚生病院 消化器内科 副院長・消化器内科部長
Adolescents And Young Adults 世代に対する子宮頸がん検診受診勧奨プログラムの開発と評価：社会実装研究	市川　義一	日本赤十字社静岡赤十字病院 産婦人科 第二産婦人科部長
わが国における真のがん検診受診および受診率把握実現とそれに基づく受診率向上対策実施の提言作成のための調査	齊藤　英子	国際医療福祉大学三田病院 予防医学センター・婦人科講師
高齢者の消化器がん検診受診時における検診受診の利益・不利益に関する理解状況およびヘルスリテラシーの分析	山﨑　恭子	帝京大学 医療技術学部看護学科 教授

2022年度がん検診受診

2023年度版・がん検診年次報告書

5大がんは913万3084人

肺・大腸は増⇧　胃・乳房・子宮頸部は減⇩

日本対がん協会

日本対がん協会は、2023年度版・がん検診年次報告書を発行した。全国のグループ支部のうち、がん検診を実施している42支部の2022年度の実施状況を集計・分析した。コロナ禍が続く中、受診者数は986万5397人と２年連続で前年度を上回ったが、コロナ禍前の1000万人台には届かなかった。

42支部が2022年度に実施したがん検診は胃、子宮頸部、乳房、肺、大腸、子宮体部、甲状腺、前立腺、肝胆膵腎の九つで、計986万5397人が受診した。国内で新型コロナウイルス感染症の感染初確認後にあたる2020年度の889万1958人、2021年度の976万5511人から回復傾向にあるが、2019年度の1088万130人を９％下回り、コロナ禍の影響が続いているとみられる。

がん死亡率を低減させるという科学的根拠に基づき、国が推進している五つのがん検診（胃、肺、大腸、乳房、子宮頸部）の受診者は、2022年度が913万3084人で、2021年度の906万2369人を上回った。2021年度比で、肺がん検診は1.9％増、大腸がん検診は3.1％増だった。一方で、胃がん検診は0.4％減、乳がん検診は2.4％減、子宮頸がん検診は2.1％減となった。

胃がん検診

受診者数は169万9368人で、前年度から7623人少ない。コロナ前から減少傾向にあり、コロナ禍の影響は慎重な判断が求められる。X線検査の受診者が161万7664人と多いが、内視鏡検査の受診者は前年度よりも増え、X線検査は減少した。形態別では、住民検診は2021年度の102万9797人から100万9991人へ約２万人減少したが、職域検診は65万3952人とコロナ禍前の66万3394人に近い水準を保った。

子宮頸がん検診

受診者数は111万922人で、前年度より２万3844人少ない。コロナ禍前の2019年度と比べても約10％減となった。形態別では、住民検診が83万2790人で2019年度の86万8923人を下回ったが、職域検診は16万4443人で2019年度の14万8194人から約11％増えた。住民検診はコロナ禍の影響が大きかったことがうかがえる。

乳がん検診

受診者数は109万5875人で、前年度より２万6733人少ない。形態別では、住民検診が90万302人で前年度より２万7238人減ったが、職域検診は17万2088人で前年度とほぼ同じ水準だった。2019年度と比べると、住民検診は大幅減、職域検診は5026人増えた。精検受診率は五つのがん検診で唯一、国の目標の90％を上回ってい

グループ支部のがん検診実施状況

	実施団体数	受診者数	前年度比	がん発見数	がん発見率
胃がん※	42	①1,699,368	▲7,623	1,689	0.10%
		②1,617,664	▲10,345	1,563	0.10%
	42	①1,706,991	―	1,691	0.10%
		②1,628,009	―	1,565	0.10%
子宮頸がん	42	1,111,922	▲23,844	142	0.01%
	42	1,135,766		145	0.01%
乳がん	42	1,095,875	▲26,733	3,148	0.29%
	42	1,122,608		3,120	0.28%
肺がん	42	2,798,244	54,262	1,243	0.04%
	42	2,743,982		1,332	0.05%
大腸がん	42	2,353,022	74,635	3,814	0.16%
	42	2,199,623		3,944	0.17%
子宮体がん	12	17,721	85	36	0.20%
	15	17,636		29	0.16%
甲状腺がん	2	825	▲33	1	0.12%
	2	858		0	0.00%
前立腺がん	36	419,036	21,528	1,865	0.45%
	36	397,508		1,698	0.43%
肝胆膵腎がん	19	294,731	7,519	145	0.05%
	20	287,140		165	0.06%
合　計	2022年度	①9,865,397	99,886	12,083	―
		②9,783,693	97,164	11,957	―
	2021年度	①9,765,511	―	12,124	―
		②9,686,529	―	11,998	―

◆上段：2022年度、下段：2021年度
※「胃がん」「合計」の①はX線検査と内視鏡検査の合計、②はX線検査のみ

たが、2022年度は88.12％となり、２年連続で下回った。がん発見率は0.29％で前年度の0.28％を上回った。

肺がん検診

受診者数は279万8244人で、前年度から５万4262人増えた。半面、2019年度と比べると、38万2441人少ない。形態別では、住民検診が194万1306人で、前年度から２万3354人増えた。職域検診は77万5869人で、前年度とほぼ同水準だった。精検受診率も81.18％で前年度とほぼ同水準だった。

大腸がん検診

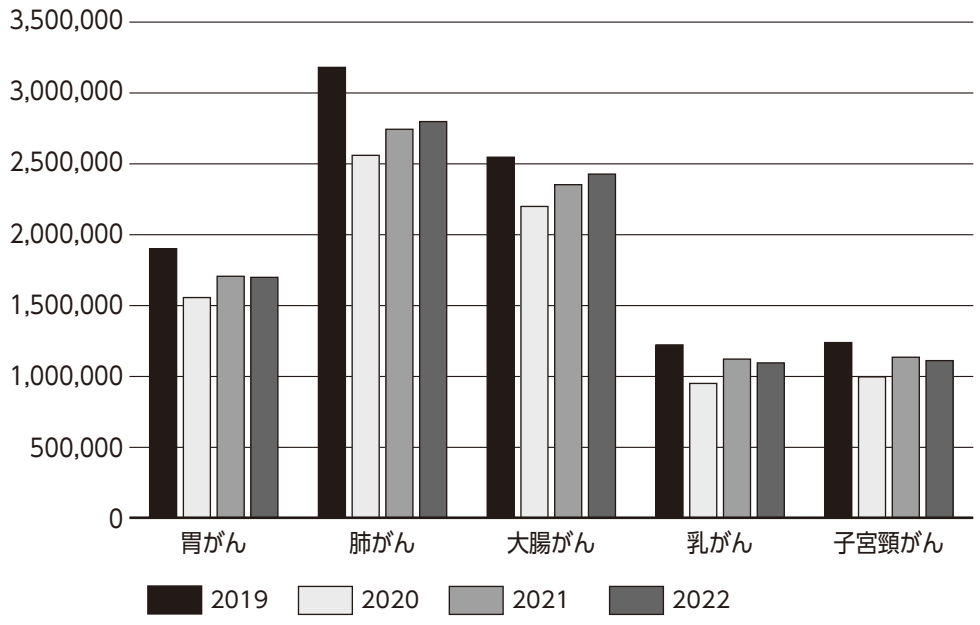
受診者数は242万7675人で、前年度より７万4653人増えたものの、2019年度の254万6998人には届かなかった。形態別では、住民検診が157万2302人で、前年度より５万8551人増。職域検診は88万1808人で前年度から３万6819人増え、2019年度の81万7934人を大幅に上回っており、コロナ禍の影響が少なかったとみられる。その一方で、精検受診率は全体で65.49％と低調で、前年度の65.94％も下回った。

５つのがん検診の実施状況

	受診者数	前年度比	要精検率	精検受診率	がん発見数	がん発見率
胃がん※	①1,699,368	▲7,623	4.09%	80.77%	1,689	0.10%
	②1,617,664	▲10,345	5.04%	77.74%	1,563	0.10%
	①1,706,991	―	5.55%	82.09%	1,691	0.11%
	②1,628,009	―	5.17%	79.20%	1,565	0.10%
子宮頸がん	1,111,922	▲23,844	1.43%	83.14%	142	0.01%
	1,135,766		1.52%	80.42%	145	0.01%
乳がん	1,095,875	▲26,733	4.12%	88.12%	3,148	0.29%
	1,122,608		4.31%	87.01%	3,120	0.28%
肺がん	2,798,244	54,262	1.95%	81.18%	1,243	0.04%
	2,743,982		1.89%	81.63%	1,332	0.05%
大腸がん	2,353,022	74,635	5.35%	65.49%	3,814	0.16%
	2,199,623		5.62%	65.94%	3,944	0.17%
合　計	①9,133,084	70,175	―	―	10,036	―
	②9,051,380	67,993	―	―	9,910	―
	①9,062,369	―	―	―	10,232	―
	②8,983,387	―	―	―	10,106	―

◆上段：2022年度、下段：2021年度
※「胃がん」「合計」の①はX線検査と内視鏡検査の合計、②はX線検査のみ

５つのがん検診受診者数の推移



※「胃がん」はＸ線検査と内視鏡検査の合計

がん相談ホットライン　03－3541－7830

毎日受け付けています
【受付時間】　10：00～13：00　15：00～18：00
社会保険労務士による「がんと就労」電話相談の予約はインターネットの専用フォームで受け付けます。がん専門医による相談は今年度休止します

社労士による電話相談

電話がつながりにくいことがあります。何卒ご了承ください

若手医師の海外研修を支援　2023年度MOD奨励賞に2医師

岩国医療センター呼吸器内科の西井医師、富山大学皮膚科の松井医師

日本対がん協会は、「リレー・フォー・ライフ（RFL）マイ・オンコロジー・ドリーム（MOD）奨励賞」の2023年度の受賞者を発表した。独立行政法人国立病院機構岩国医療センター呼吸器内科の西井和也医師と、国立大学法人富山大学皮膚科の松井悠医師の２人。西井氏は米国のMDアンダーソンがんセンター、松井氏は同国のシカゴ大学医学部で１年間研修する。

この賞は、日本対がん協会と国内各地の実行委員会が行うチャリティ活動「リレー・フォー・ライフ・ジャパン（RFLJ）」に寄せられた寄付金をもとに、国内の若手医師を育成し、地域のがん医療の充実を図るため、2010年度に創設された１年間の米国留学研修プログラム。全米有数のがん専門病院であるテキサス大学MDアンダーソンがんセンターとシカゴ大学の協力、一般社団法人オンコロジー教育推進プロジェクト（東京）の支援により、これまでに21人を送り出してきた。シカゴ大学への留学は2018年度以来になる。

リレー・フォー・ライフ・ジャパン　2024年度のリレーイベント

5月11日の熊本から全国50会場で予定　SWRは三重で5月に開催

がん患者や家族を支援し、地域全体でがんと向き合い、がん征圧をめざして日本対がん協会と各地の実行委員会が開催するチャリティ活動リレー・フォー・ライフ（RFL）の2024年度は５月11～12日の熊本から始まり、全国50会場で予定されている。

RFLは1985年、米国で一人の医師がアメリカ対がん協会（ACS）への寄付を集めようと、24時間走り続けたことに始まり、世界34カ国、約2460カ所で開催されているチャリティ活動。日本では2006年、茨城県つくば市でプレイベントがあり、翌年に兵庫県芦屋市と東京で正式なリレーイベントが開かれた。リレーイベントはACSからライセンスを与えられた日本対がん協会と各地の実行委がリレー・フォー・ライフ・ジャパン（RFLJ）として開催し、2023年度は全国47カ所で４万人超が参加した。

一方、新型コロナの影響で、大勢が集うリレーイベントは縮小し、オンラインイベントやスマートフォンの専用アプリを使って全国どこからでも、好きな時間に参加できる新しい形のRFL、セルフウオークリレー（SWR）も始まった。

こうした活動によるRFLJからの寄付金は、がんに関する無料電話相談、新しい治療法や薬剤の開発・がん患者のQOL改善のための研究費助成事業、若手医師育成のための留学支援事業などに役立てられている。

新型コロナの「５類」移行から２年目となる2024年度は、RFLJえな（岐阜）、RFLJあいち（愛知）の初開催を含め全国50会場でリレーイベントが予定されており、多くの会場で夜越えイベントも実施される。また、SWRは三重で５月からリレーイベントと併せて開催されるなど、各地で予定されている。

４月末現在で会場、日時が決定しているリレーイベントは次の通り。がんサバイバーは参加費無料。

2024年度RFLJリレーイベント

	エリア	都道府県	会　場	開催日時
5月	九州・沖縄	熊　本	熊本市白川公園	5/11 12:00～5/12 9:00
	近　畿	三　重	松阪市総合運動公園	5/18 15:00～5/19 8:00
			RFL【三重】2024セルフウオークリレー	5/1～5/31
	関東甲信越	埼　玉	所沢航空記念公園 記念館前広場	5/25 12:00～19:00
6月	中国・四国	徳　島	ふれあい健康館きっかけ空間（徳島市）	6/1 13:00～17:00
	中　部	愛　知	あいち健康の森公園 大芝生広場（大府市）	6/8 12:00～19:30
	東　北	岩　手	北上市みちのく民俗村	6/8 13:00～20:00
	近　畿	兵　庫	みなとのもり公園（神戸震災復興記念公園）	6/8 14:00～6/9 9:00（予定）
	東　北	青　森	八戸まちなか広場 マチニワ	6/15 12:00～19:30
7月	近　畿	和歌山	和歌山城公園 砂の丸広場	7/6 12:00～7/7 13:00
8月	関東甲信越	山　梨	山梨県立大学池田キャンパス（甲府市）	8/30 16:00～8/31 11:00
9月	中国・四国	広　島	尾道市総合福祉センター	9/22 13:00～9/23 12:00
	中国・四国	香　川	サンポート高松 デックスガレリア	9/28 12:00～9/29 10:00（予定）
10月	関東甲信越	神奈川	みなとみらい臨港パーク（芝生広場）	10/5 16:00～10/6 11:30
	東　北	宮　城	青葉山公園 仙臺緑彩館	10/19 12:00～10/20 12:00（予定）

＊RFLJ公式サイト：https://relayforlife.jp/（４/30現在）

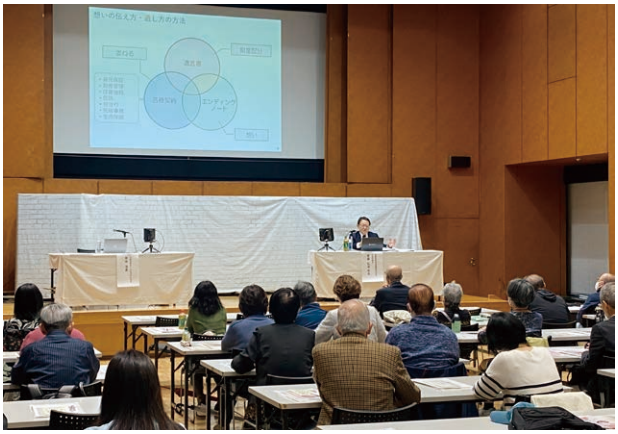
「人生を豊かにするエンディングノートの書き方」セミナー

東京・築地で開催 ネットで配信も

日本対がん協会

日本対がん協会は４月24日、東京・築地で、「人生を豊かにするエンディングノートの書き方」セミナーを開き、約40人が参加した。終活でエンディングノートを利用する人は多いが、「何から書き始めるか」「書き進められない」などと悩んだり、「死」を意識して先延ばししたりするケースも。その一方で、自分の人生を振り返り、今後を豊かにするために考えを整理するツールとして活用する人もいる。

セミナーでは、遺贈寄附推進機構株式会社代表で、朝日新聞Reライフ.netで「今すぐできる終活講座」を連載している齋藤弘道さんが「人生を豊かにするエンディングノートの書き方 本当に必要な終活とは」と題して講演。齋藤さんは、終活には「安心して生き続ける」「死後に憂いを残さない」という二つの目的があることや、家族や友人らへ自分の想いを伝え、遺すツールとして法的効力がある遺言書と自由に書けるエンディングノートの役割の違いなどを解説。自身が考案したエンディングノート『ご縁ディングノート®』を使い、参加者に書き方や活用方法をアドバイスした。



エンディングノートと遺言書の役割などについて解説する齋藤さん

また、齋藤さんは、大切な人や社会のために財産を役立てる方法の一つとして、遺贈寄付を紹介。日本対がん協会の担当者が活動内容を説明し、寄付を呼び掛けた。

この日の模様は後日、ネットでも動画を配信する。

受動喫煙による肺がんの遺伝子変異誘発を証明

国立がん研究センター、東京医科歯科大の共同研究グループ

肺がんの危険因子である受動喫煙について、国立がん研究センターと東京医科歯科大学の共同研究グループは４月、非喫煙の肺がん患者の受動喫煙歴と遺伝子変異の関係を調べ、受動喫煙が喫煙者とは異なるタイプの遺伝子変異を誘発し、初期の腫瘍細胞の悪性化を促してがんを引き起こしていることが分かったと発表した。

国立がん研究センターによると、肺がんはがん死因の１位であり、日本では年間に約７万6000人、全世界では約180万人が死亡している。本人の喫煙（能動喫煙）に加え、喫煙者の周囲の煙を吸う受動喫煙は肺がんの危険因子であり、国際がん研究機関（IARC）は最も危険レベルが高いグループ１（ヒトに対して発がん性がある）に分類。国立がん研究センターも受動喫煙と肺がんとの関連を「確実」とリスク評価をしている。国は改正健康増進法に基づき、学校や病院、児童福祉施設、行政機関などで受動喫煙防止を図ってきた。ただし、受動喫煙による発がんのメカニズムは明らかにされていなかった。

研究グループは、非喫煙者女性291人と喫煙者女性122人の肺がん（肺腺がん）のゲノム全体の変異を同定し、喫煙や受動喫煙の有無から遺伝子変異の誘発や特徴を調べた。

その結果、受動喫煙を受けて発生した肺がんは、受動喫煙を受けずに発生した肺がんより多くの遺伝子変異が蓄積していた。また、たばこ中の発がん物質によって直接引き起こされるタイプの変異は、受動喫煙者はごく稀であり、受動喫煙は能動喫煙とは異なるメカニズムで変異を誘発することがわかった。

受動喫煙は、肺がんの発生初期に生じるがん遺伝子変異の頻度には影響しておらず、受動喫煙により誘発された変異の多くは、がん組織内のすべてのがん細胞のDNAに一様には存在していないことから、腫瘍細胞の発生後に不均一性（多様性）を増加させることで初期の腫瘍細胞の悪性化を促進していると考えられる。

この研究結果を受け、国立がんセンターは、受動喫煙に対する新たな肺がん予防法の開発が期待されるとともに、健康被害を防ぐため、日本国内でも国際的な標準である屋内全面禁煙の法制化が望まれる、としている。

古本で日本対がん協会に寄付ができます

読み終えた本やDVDなどを活用しませんか？

charibon by VALUE BOOKS

詳しくは「チャリボン」 https://www.charibon.jp/partner/jcs/
（ISDNのバーコードがついた書籍類が対象です）

お問合せ（株式会社バリューブックス）：0120－826－295
受付時間：10:00－21:00（月～土）　10:00－17:00（日）

「がんと診断された方への最初の処方箋 ―わたしらしく生きるために―」

６月２日に東京・築地で開催　JAPAN CANCER SURVIVORS DAY 2024　日本対がん協会

日本対がん協会は6月2日、「JAPAN CANCER SURVIVORS DAY（ジャパン・キャンサー・サバイバーズ・デイ）2024」を東京・築地の国立がん研究センターで開催する。「がんと診断された方への最初の処方箋 ―わたしらしく生きるために―」をテーマに、がん専門医らの講演、がんの患者会や支援団体・企業のブース出展などがある。

毎年６月第１日曜日は、米国をはじめ世界各地で「National Cancer Survivors Day®」とされ、がんを生き抜いているがんサバイバーを祝い、がんと診断された人を励まし、その家族を支援する日となっている。日本対がん協会では、がんサバイバーと家族へ向けて、がん治療と療養生活に関する支援情報を提供するイベントとして、がん患者・家族を支援する「がんサバイバー・クラブ」が中心となり、2018年から「JAPAN CANCER SURVIVORS DAY（JCSD）」を開催してきた。

７回目となる今年は、がんと診断されたばかりの人や現在治療中の人が安心して治療・療養生活を送れるようになるために、がん専門医らを講師に迎え、「わたしらしく生きる」ためのヒントを紹介してもらう。

講師とテーマは次の通り。NPO法人日本がんサバイバーシップネットワーク代表理事の髙橋都氏「がんになっても人生は続く～『わたしらしく』生きるためのヒント」▽国立がん研究センター東病院サポーティブケアセンター副センター長の坂本はと恵氏「大切な人ががんになった時の心との向き合い方」▽国立がん研究センター中央病院多施設研究支援室長の片山宏氏「あなたがこれから受けるがん治療について」▽秋田厚生医療センター呼吸器内科長の守田亮氏「がんと診断された時　家族・患者と医療者の相互コミュニケーション、患者力について」。

また、がん患者や家族らが必要な支援へたどり着けるように、さまざまな支援活動を行っている20以上の支援団体・企業がブース出展して情報を提供する。当日のイベントは午前11時～午後３時（午前10時開場、午後４時閉場）の予定。

入場希望者は事前に専用フォーム（https://ws.formzu.net/fgen/S18288445/）から申し込む。定員400人（車いす席は２席）。５月30日締め切り。

詳しくは、がんサバイバー・クラブの公式サイト（https://www.gsclub.jp/jcsd2024）で。

東京レガシーハーフマラソン2024　秋に開催

日本対がん協会も寄付先団体に　寄付金及びチャリティランナーを募集

日本対がん協会はこの秋、一般財団法人東京マラソン財団が開催する「東京レガシーハーフマラソン 2024」のチャリティ事業に寄付先団体として参加する。これに伴い、日本対がん協会は寄付金及びチャリティランナーを募集している。

大会は10月20日に予定されており、コースは東京2020パラリンピックのマラソンコースを活用した、国立競技場を発着する21.0975㎞。東京マラソン財団のチャリティ事業は「走れる幸せを誰かの幸せにつなげよう」との想いから始まった。東京マラソンや東京レガシーハーフマラソンを走り・支え・応援する人たちに社会貢献について考え、実際に寄付をするきっかけを届け、ひとりひとりのハートと社会を繋げる取り組み。

東京レガシーハーフマラソン2024チャリティでは、さまざまな社会活動に取り組む団体が寄付金及びチャリティランナーを募る。いずれかの寄付先団体へ５万円以上の寄付をした人が参加でき、走ることを通じてチャリティ活動の素晴らしさを発信してもらう。日本対がん協会のチャリティランナーは定員50名（先着順）で、５月24日に締め切る。

日本対がん協会への寄付金は、無料電話相談「がん相談ホットライン」を中心とした患者支援活動、がん予防やがん検診の啓発推進といったがん征圧活動に活用される。

募集要項などの詳細は協会ホームページ（https://www.jcancer.jp/）で。寄付金のみも受け付けている。